

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 168号

平成28年 4月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (17)

神の約束を信じること、それが信仰である

贖いを信じるということが信仰である。贖いを信じるということは向こうが贖うのであり、我々がどうするという事ではない。我々の確信とかそういうものではない。ロマ書4章17～21。アブラハムの信仰、自分にとっては不可能なことを神がなし給うと信じた、それが信仰である。自分の方から言えば救われることは不可能であるが、神が救って下さるという約束を信じること、それが信仰である。

それは聖霊が臨んで分かる。自分が信じるのではなくキリストの贖いによって信ぜしめられるのである。受け身である。

(昭和48年10月26日 金曜会)

私の荷（目の前の義務をなすこと）は軽い

私のくびきは負いやすく、私の荷は軽いからである」（マタイ伝 11 章 30）。信仰は困難だが不可能ではない。不可能なら初めから努力する必要もない。「汝の如く隣人を愛す」とは神の意志を行なうことである。復活を信じることがくびきの意味であり、目の前の義務をなすことがイエスキリストの荷の意味である。ロマ書の大意もこれに尽きる。

（昭和 49 年 2 月 1 日 金曜会）

今世は来世に入る準備の場所

内村鑑三の書物『一日一生』を読むことにしている。又『続一日一生』もある。これを読むことをお勧めしたい。…

『続一日一生』の昨2月21日の分について。…

「そうして永遠の来世が確実になるに至りまして、価値のない今世に真個(ほんとう)の価値が付いてくるのであります。まず第1に、私どもは世をいとわなくなるのであります。この世の苦痛は来世の希望をもって慰め得て余りあるのであります。今世はまた来世に入る準備の場所として無上の価値を有するに至ります。そのもの自身のためには何の価値もないこの世は、来世(つぎのよ)と相関して、必要欠くべからざるものとなるのであります。日々の生計(なりわい)の業の如き、そのもの自身のためには心思を労する程の価値なきように思われますが、しかし、これによって来世獲得の道が開かるるを知って、小事が小事でなくなるのであります。しかしながら一たびこれを握るの特権を付与されまして、この無意味の今生が意味深長のものとなるのであります。」これはこの本の文章の中でも大事な部分だろう。そしてこの本を30年、50年と読み続けられることをお勧めする。

(昭和49年2月22日 金曜会)

聖書の勉強が大切

高校～大学、内村鑑三の集会に出た。朝白山教会→大手町の聖書集会。先生の集会は聖書の講義。毎日聖書を読む。少しく聖書が分かり始めた。天の書である。生まれつきの人間には分からない。分かった人から説明をもらわんといかん。…

新約聖書：Book 1 はロマ書。Book 2 はロマ書以外の手紙と 4 福音書。Book 3 はヨハネ黙示録。これで正しき信仰が得られる。ロマ書を学ぶためには3年かかる。Book 1 のロマ書を先生から聞く。注解書は外国語 I C C、モファット etc. がよろしい。I C C の Commentary がよい。John ノックスのものがよろしい。Althaus のNTDがよい。何かしら一つ注解書をもって勉強するがよろしい。これによってBook 2 が分かる。聖書を抜きにして、聖書を勉強せずにキリスト教信仰はあり得ない。物事は基礎がなくしては駄目。「神の子とされる」「贖われる」「天国の民となる」「再臨」「復活」とかこの根本的な主張をはっきり分からずにキリスト教信仰はあり得ない。人生の困難にあった時に自分の信仰が本物かうそのものか分かる。どうぞ諸君は聖書の勉強をやりなさい。3年間がっちりやりなさい。朝最も良い時間に3章読め。 (昭和49年9月13日 金曜日)

幸福を与えるものは聖書

19世紀、英 Gladstone（陸奥宗光が渡英し、Gladstone の敬虔さに感心）が晩年に「カントリーバトラーの analogy」という本を書いた。来世存在の哲学的意義を明らかにしようと貢献した。政治上の貢献より大きいと自らも述べている。「我々の幸福は外の境遇によらず、我自身にかかっている」という言葉を思い出す。政治経済は、幸福の材料を提供するが、幸福そのものは与えない。境遇の改善必ずしも幸福ならず。幸福を与えるものは聖書。社会科学、自然科学からは得られない。

聖書の勉強について suggest。永遠の生命をもらう時が幸福なのである。聖書を学ばずしてキリスト教信仰はない。聖書は自分で分かるものものではなく、霊的真理は先生、先輩より教えてもらわずして理解できるものではない。

第一、君、ロマ書に2~3年かかる。講義もしくは注解書で勉強すべし。ロマ書はキリスト教の霊的真理を述べ尽くしている。幸い同志会に来たのだから同志会にいる間にロマ書だけは勉強して欲しい。これが幸福の基礎だ。神の賜物を自分のものにする。

（昭和49年10月11日 金曜日）

主の祈りについて

マタイ伝6章9～15。主の祈り。クリスチャンの生活態度を教えている。我々のバロメーターである。これから離れるなら脱線している。ところが僕もこうなっておらん。

“御名をあがめさせたまえ” 救われた人には自然に出てくる筈。

“御国を来たらせ給え”キリスト再臨の願い、本当のクリスチャンはこうなのだ。

“御心の天になるごとく地にもなさせたまえ” 現在の大将は悪魔。

“日々の糧を今日も与えたまえ” 神様の与えられたもの、感謝が出るのは当然の筈。

“私達が罪を許すが如く我等の罪を許したまえ” ここに我等の救いがかかっている。

“試みに会わせず悪より救い出したまえ” 我々は弱い、死ぬまで危険にさらされている。

(昭和50年5月2日 金曜会)

聖書の中心課題 救い

自分にとっては同志会時代に知った内村鑑三先生の聖書講義（毎週日曜日）である。聖書の真理は年と共に徐々に理解されてくる。聖書の真理は我々の理解を超えている。従って信ずるということが必要となる。故にキリスト教が人生の支えとなるには相当の時間が必要であろう。また優れた教師—聖書の言葉をそのままに素直な形で人々に教えることのできる教師も。それは今日少ないのであろう。

しかし聖書の中心課題である救いについてよく教える教師はいるか？僅少であらう。ということは聖書の中心問題がぼやけている状態の聖書との関わりが瀰漫しているのであろう。例えば人を愛するというが、これも永遠の生命とのかかわりでとらえるのでなければ、愛の意味が分からないのである。学生時代に永遠の生命についてよく学んでおくことはどうしても必要なことではなかろうか。既に述べたように私にとっては内村先生のロマ書の講義が後々決定的な意味を持ったのであると同様に。

（昭和52年1月28日 金曜会）

はなむけの言葉

はなむけの言葉。私は 1920～1923 年同志会にいた。その後 20 年間会社員生活をしてから伝道者になった。自分のしたいことは後にして、すべきことをせよ。無理をする必要はない。重要なのは知識ではなくて我がものとする事。

(昭和 52 年 2 月 25 日 金曜会)

自分に与えられた竹馬の力で進め。おもらいの生活から自分でなす生活へ。したいことをするのではなしに、すべきことをする生活。それは復活の望みによる。聖書は勉強して分かる。すべきことは神に従うということ。

(昭和 52 年 4 月 22 日 金曜会 署名式)

信仰は聞くことより生ずる

5月15日。大正10年(1921年)、56年前同志会にいた。毎日曜日白山教会、朝9~10時のバイブルクラス。大手町で内村鑑三先生の講義が10時半から。同日第3章21の講義があった。大正10~11年はロマ書の講義であった。

日記によると律法とは別に神の義が表わされた。内村先生の訳は「道徳とは無関係に」であり、私の信仰の根底をなす。信仰は聞くことより生ずる。読むことではない。

(昭和52年5月13日 金曜日)

ロマ書を勉強せよ

聖書の真理は我々の生来の理解を超えている。我々はキリスト教を外国語の勉強と同じで毎日の努力しかない。ロマ書を勉強せよ。内村鑑三先生の講義録を読むべし。それをよく勉強すればキリスト教の真理が体験できる。忍耐して勉強すれば分かるようになる。

(昭和52年9月30日 金曜日)

「信ずる」能力を訓練せよ

前回はキリスト教の真理について語った。生まれつきの理性をもってしては理解できない。その意味ではそれは正しいが、同志会の内会員は機会を持てるのだから活用してほしい。つまり「信ずる」ということを通して、生まれながらの理性をこえた心理を理解してほしい。能力を訓練しないと退化するように、「信ずる」という行為を続けていなければ「信ずる」能力が退化していく。唯物思想の影響で「信ずる」能力が低下している。キリスト教の真理を外国語のつもりで勉強して欲しい。早祷や金曜会や日曜礼拝などを通してキリスト教の真理を理解してほしい。

(昭和 52 年 10 月 7 日 金曜会)

先生は大切

N兄は矢内原忠雄先生のご指導を受けられたが、先生は非常に大切。福音に限らない。矢内原、金沢先生は内村先生のご指導を受けた。私は内村先生の集会に出席し人生が変えられた。聖書の真理は分からない。

大事なことは見えない。「神は愛なり」は人から教えられたものにはすぎない。愛は単数、すべてを含む。永遠の生命の姿だから単数で受ける。60年前、白山教会で初めて福音を聞いた。福音の一瞥。その後でロマ書の講義における清めの理論的構成が分かった。諸君も福音の正義を一瞥させてもらえ。

(昭和53年6月9日 金曜会)